

〔『法学新報』第32巻1(361)号 大正11年1月1日〕

○中央大学学生大懇親会 中央大学創立第三十六回記念式は十二月十一日の所当日は原首相の葬儀当日に該当せるにより十二月四日午後一時より大講堂に於て開催せり厳肅なる入江義一君の開会の辞を以て正十二時半大会の幕は落され君は語勢を強め黄金と靈肉の戦を論し資本と労働の不調を叫び混沌たる現時の思想界に立て吾人は正義と自由の大旗を翻し敢然として迷える民衆を善導すべく偉大なる人格者たらんことを望むと結び満場拍手の中に降壇統て学生一同朗らかに「質実剛健これ我校風」と合唱すれば吾健兒の意気天を衝くの概あり了りて辞達学会の中堅森輝雄君登壇『黎明の雄号<sup>(ママ)</sup>』の題下に二十分に亘る大獅子吼其堂堂たる態度莊重たる音調明確なる論理は満場の若人の血を湧かさしむ此の頃より入場者引きも切らずさしもの大講堂も立錐の余地無く委員の活動振り見るも憐れなり再び幕は落されて舞台は一転して余興の数数か開始せられ先つ劈頭第一本学學員課宮崎氏か胡麻塩頭も何のその学生時代に逆行してか講談赤垣源藏の一席に長広告を振り一同を嘩然たらしむ而も奇抜にして興味ある材料を冒頭に振りかざし老熟大家も難しとする悲喜のズエスチュアに満場抱腹の極に達す統て伊藤痴遊か幕末史の一編二条城内を語る言言句句此の人ならては出来さるこ

となり次第は進行し筑前琵琶の創始者高峰筑風の川中島に鳴を静めて感激し引きつつき本学学生C、M、S会のマンドリン合奏、十六夜の琴、尺八合奏、小田原國尊氏の勇大にして且つ情熱なる薩摩琵琶に聴衆を酔はず時に場内の電灯既に灯され若人の顔を紅に染む來賓席には馬場(鉄一)理事、佐藤理事、天野先生を始めとし堀、片山、出羽、丸山、杉、柳澤、沼波、廣井、吉田、鬼澤、岡倉の諸教授列席せられ一方記録係席には雑誌部の委員ペンを走らせ余興部の委員は準備と片付けに忙殺せらる正五時当日の大出物鳴物入りの丸一一座の大神楽始められ皿を鼻の上にて廻し或は傘の上にてマリを転しさては二名の支那人が大きな瓶を頭にて調子を取りながら奇抜なる妙技を次から次へと間断なく続け行く一同魂を奪はれ居る中に委員は休憩を宣し学生一同には寿司、餅菓子を配付し一同満腹の頃再び振鈴と共に学生の隠芸は開始せられたり岡田君の浪花節、淺鳥君の独唱、森君の劍舞、荒田、屯谷君の尺八合奏、鈴木君の琵琶、柳君の落語、C、M、S会のマンドリン合奏等交々入れ変り妙技を振り聴衆さながら水を打ちたる如し大会は正にクライマックスに達する頃園田君登壇、閉会の辞を述べ天野先生の発声にて中央大学の万歳を三唱し盛況裏に散会したるは最早都大路に夜風寒き八時過なりき筆者は此稿を終ふるに当り学友会の一委員として此大会か空前の盛況に終りたることを喜ふと同時に天野幹事を始め学友会各部委員諸兄の努力を深謝する者なり  
(委員今澤生報)